

第54回日本臨床化学会年次学術集会

富永 麻理*

第54回日本臨床化学会年次学術集会は、平成26年9月5日(金)から9月7日(日)の3日間、東京大学本郷キャンパスで開催されました。集会長は、東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学・医学部附属病院検査部 矢富 裕教授が務められ、メインテーマとして、「臨床化学の原点を考える」が掲げられました。日本臨床化学会は、医師、臨床検査技師、薬剤師、医学・薬学・臨床検査学系研究者、企業など多職種の研究者が多彩な研究を展開しながら今日までの歴史を作り上げ、発足後50年以上になる学会です。臨床化学とは、分析技術を土台に据えた化学検査を医療に提供する実務と、病因・病態の解明や治療・予防に寄与することを目標にした研究の両輪から成り、実践

的・学術的な側面を持つ分析化学から臨床医学までを包括する学問領域です。このような多様性が反映され、様々な方面からの臨床化学的アプローチが発表された3日間でした。

今回の学会場は、東大本郷キャンパスという歴史的建造物が林立する学問の府たるにふさわしい素晴らしい環境でした。学会発表も、そそりたつ古い木造の階段教室をいくつも使って行われ、それが学会に重みを加えていました。

矢富集会長の学術講演(生理活性脂質の臨床化学)、2つの特別講演(小池和彦先生：「肝臓病診療と臨床化学」・遠藤 章先生：「スタチンの誕生」)、学術賞受賞講演(池田 均先生：「肝臓の病態生理における Sphingosine 1-phosphatase (SIP)



学術集会案内板



東京大学赤門

*高知学園短期大学医療衛生学科医療検査専攻 tominaga@kochi-gc.ac.jp

の役割)、教育講演4題、シンポジウム6題が企画されていました。さらに、臨床化学会の特性を示す各種専門委員会(クオリティマネジメント、リポ蛋白検査、POCT、止血・血栓検査、酵素・試薬、血漿蛋白、糖尿病関連指標、栄養)によるプロジェクト報告も実施されました。また、企業シンポジウムとして「診断と治療の未来を探るーその鍵は臨床化学にありー」と題して、「臨床化学の未来とiPS細胞」など5講演が行われました。ランチョンセミナー(11企画)も盛会で、朝、目的の券を手にするのが困難な状況でした。学会の最終日の午後には、特別企画講習会(認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師制度構築に向けて)と、臨床化学アカデミー(臨床化学的測定法の基礎理論)3題と関東支部若手企画(そのパニック値、本当にパニック?)も催され、臨床化学入門者から専門職を目指す技師向けまで、盛りだくさんの企画がありました。

今回の学会では、YIA(Young Investigator Award)のセッションが設けられ、地方部会から推薦された30歳以下(来年度からは35歳以下になる予定)の優秀な若手研究者による口頭発表が5演題ありました。質量分析を応用した気管支肺胞洗浄液や酵母様真菌の解析、自己免疫性甲状腺疾患と遺伝子多型の関連、C型肝炎ウイルス抗体測定試薬の

比較による特殊な患者検体に対する対応、アミロイドーシス新規診断システムの立ち上げなど、臨床化学の基礎研究から臨床研究に亘る報告がありました。臨床化学の若い担い手が並んで、表彰式が行われ、会場からは称賛の拍手が贈られました。臨床検査分野の中で、臨床化学は、自動化が最も進み、若い臨床検査技師は、形態系や生理系の分野に興味を持ちがちですが、このような若手の方々が育ち、次世代の臨床化学研究を牽引して下さることを期待したいと思います。

一方、大先輩の研究者の講演が企画され、若い研究者への意義深いメッセージとなりました。それは、「スタチンの誕生」と題した遠藤章先生のお話でした。先生は、大学卒業以来、紆余曲折を経ながら、半生をかけて、脂質異常症治療薬の開発に取り組みされました。その歴史を、つぶさに、直接、先生の言葉でお聞きすることができたことは幸せでした。

この講演の中で忘れられない言葉があります。『天然化合物は、何十億年もの進化の過程でできてきたものです。進化は科学者より賢い。このような経験をでき、僕は科学者になってよかった。』先生の研究生活の集大成ともいえるこの言葉にとっても感動を覚えました。

さらに、今回の学会で特筆すべきことは、『認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師制度』の構築に関する説明会と講習会が開かれたことです。現在まで、臨床検査の様々な分野(認定一般検査技師、認定心電検査技師、認定臨床染色体遺伝子検査技師、認定管理検査技師、認定病理検査技師、認定認知症領域検査技師など)に、認定技師の資格制度がありますが、臨床化学・免疫検査分野は、後れを取っていました。認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師は、臨床化学・免疫分野において精度管理を担う中心として位置づけられ、定量系検査業務の精度保証を担保する人材となることを目指しています。日臨技が進める「検査説明ができる検査技師育成」の事業展開において、各疾患の病態を把握し、診断・治療に繋がるデータ解釈にも寄与できる人材となることが期待されています。日臨技のホームページ



YIA 表彰式

に制度の詳細な記載がありますが、今回の学会では、この新たな認定技師になるための手続きが説明され、続いて、受験資格を得るための研修会も企画されていました。臨床化学・免疫分野の検査に携わる臨床検査技師の方々が、熱心にメモを取る姿が会場全体でみられ、溢れんばかりの参加人数でした。

日本臨床化学会は学会員 1,300 名に達し、今回の学会参加者は 708 名でした。臨床検査の自動化が進み、臨床化学・免疫分野の臨床検査に携わる人数が減少し、学会員の数も伸び悩んでいたようですが、新たな認定資格の立ち上げで、学会員の増加も見込まれるようでした。

臨床化学は、病態診断のキーとなる広い範囲の検査データを供給するという大きな役目があります。今回の学会の取組の中で注目したのは、共用

基準範囲の設定ということでした。「日本における主要な臨床検査項目の共用基準範囲案—解説と利用の手引き—」が提示され、日本臨床検査自動化学会の「臨床検査の診断的有用性評価マニュアル」が参考になることが示されました。賛否両論の意見が交わされましたが、臨床検査の精度保証をして行く上で、重大な意味を持つと思われました。

「臨床化学の理念に立ち返り、臨床化学会の独自性を前面に打ち出し、オンリーワンの学会としての在り方を追求すること」を目的とした学会の方針がよく見える学会であったという印象を持ち、学会参加を終えました。

日本臨床検査学教育学会の会員の方で、今後は非、日本臨床化学会にも参加していただきたいという想いを強くした密度の濃い内容でした。